フランス語の「擁護・顕揚」についての論争も、ラテン語の最上の文体をフランス語で模倣することが可能であるかが問題点だった。カルヴァンの明快なフランス語散文は、16世紀に一般的にみられる錯綜した文体と一線を画し、ラブレー、モンテーニュなどと並び一種例外的な存在としてみなされるのが普通である。しかし、カルヴァンはフランス語・ラテン語両刀使いの作家であり、彼をユマニスムの以上のようなネオ・ラテンの修辞学の文脈におきなおすことで、『キリスト教綱要』フランス語版にみられる雄弁な文体が突然変異のように出現したのではないことも納得される。ユマニスムにおけるキリスト教雄弁の問題については、1980年に出版されたマルク・フュマロリの画期的な『雄弁の時代』が、トレント公会議（1563年終了）以降のカトリック教会の枠内で、より包括的により抽象的な形で論じているが、ミエ氏は、同じ問題意識にもとづきつつ、カルヴァンというプロテスタント教会を代表する一作家を重点的に研究することで、狭義のカルヴァン研究だけでなく、ユマニスム文学史研究に大きく貢献したことは疑いの余地がない。

以下、ミエ氏の著書の構成、要旨を紹介する。

全体は四部、29章から成る。第一部では「カルヴァンの修辞学的素養の形成」が論じられる。第1章は1520年代初めから1530年代初めまでの、パリでのコレージュ、大学時代およびオルレアン、ブールジュでの司法学生時代の教育、特にユマニスム文献学の手法によるカルヴァンのローマ法註解に新たな光が当てられる。第2章はセネカの『寛容論』註解（1532年）とセネカ文体から受けた影響、第3・4章は1531年から1534年までのパリ時代に、メランヒトンやシュトルムの提唱するドイツ・ユマニスムの修辞学（修辞学と論理学の一体化、哲学的修辞学）から受けた影響、第5章は、フランスを離れてからの1530年代後半の聖ジャン・クリュゾストーム（金の口の聖ヨハネ）の説教仏訳（手稿は散逸し、ラテン語序文のみ残る）と、神学理論世俗化のモデルであるクリュゾストームの民衆向けの比喩に富んだ説教文体からの影響が論じられる。以上の検証は、カルヴァンの改革派訳聖書との出会いによる「回心」の意義を相対化する。すなわち、通例考えられているように若き司法家から教会人へと変容したのではなく、むしろ、すでに文献学者・修辞家であったカルヴァンが聖書のテクストを文法、文学、修辞学的観点から眺めた結果として回心があったということであろう。

第二部「カルヴァンによる聖書のレトリックと神の雄弁」では、「回心」以降の聖書註解について分析する。序論ではまず聖書のレトリック理解についての背景が説明される。聖アウグスティヌスの『キリスト教の教え』以来の聖書のレトリックについての通念は、文彩の使用その他の点で異教の古典古代修辞学の規則にのっとりつつも、その起源、目的において異なるというものである。すなわち、聖霊によって記述されたという点、また、古典古代修辞学では、弁論者の目的は「教化する」「気に入る」「感動させる」のいずれかであるが、キリスト教雄弁は、「感動」によって人間を神への愛へと鼓舞することをその究極の欠くべからざる目的とする点である。聖書にみられる粗野な文体もこのような「聖書独特の別種の雄弁」（アウグスティヌス）の一つの姿として擁護される。こうした共通理解を下敷きに、以下の章ではカルヴァンにおける独自性が述べられる。第6、7章では、カルヴァンが「ロゴス」を、堕罪後の腐敗した人間の意志を覚醒するために、神が口頭で親しく語りかける啓示の「生きた」ことばとして理解していることを確認してから、カルヴァンによる聖書の雄弁理解の二つの原則が論じられる。第一は威厳の原則である。伝統的修辞学では、単純体、中庸体、崇高体の三文体を区別し、威厳のある内容は崇高体に対応し、文彩上の装飾的増幅を要求する。ところがカルヴァンでは、威厳は、文体の次元とは無関係に神の言葉（聖書）に常に伴うトーンにほかならない。第二は適応の原則である。神は堕罪後の人間の状態に適応するように、本来ふさわしくない文彩を使用する。『雅歌』にみられる愛の文彩、その他さまざまな聖書の比喩について、カルヴァンは隠された霊的意味を探る比喩的寓意的解釈を退け、人間の言葉では表現しえない事柄を表現する必要手段、人間の意志を覚醒するための説得の手段として有用性の観点から理解する。第8、9章はこれらの二原則にもとづきカルヴァンの聖書註解を文学ジャンル、文彩の観点か